

中務集注釈（六）

高野晴代・高野瀬恵子・加藤裕子
森田直美・斎藤由紀子・遠間倫世
曾和由記子・谷崎たまき

古今集歌人伊勢の娘、中務の家集を取り上げ、注釈を試みる。本稿では、本紀要前号「中務集注釈（五）」に続き、二四〇番歌から巻末歌二九八番歌までを扱った。当該部分でほとんどを占めるのが、二四〇番歌から二七九番歌までの源信明との贈答歌群である。その詠者は二四〇番歌で「ある人」として記されて歌群が始まり、二五七番歌には「さねあきら」と明記されるものの、「を」と「をんな」と書かれている場合が多い。二八二番歌から二九三番歌は「為基新発意へ」として出家した大江為基に贈った十二首である。また二九四番歌から二九八番歌までは麗景殿の宮の君に対する哀悼歌と考えられる。巻末歌は「為基返し」とあるが、語彙の使用の点から前歌に返した歌とは言いがたい。こうした家集の終わり方をどう捉えるか、本稿では各歌の注釈において僅かに触れたが、前稿「中務集注釈（五）」において、家族同士の贈答などを家集に残すことが、編者の強い意志だったと推測した点と合わせ、今後の課題としたい。

本稿は、研究会での発表、討論において問題となった歌を中心に抜粋

し、注釈を施している。また、歌の解釈に問題点が少ない歌に関しては、校訂本文と通釈のみ記した。

「中務集注釈（一）」～（五）」について、ご教示を賜った皆様に深く感謝し上げる。

各歌の文責を次に示す。二四〇～二四一・二六一～二六四・二九〇～二九三番（斎藤）、二四二～二四四・二五七～二六〇・二九四～二九五番（加藤）、二四五～二四七・二七四～二七五・二八二～二八五番（曾和）、二四八～二五一・二六五～二六八・二八六～二八九番（高野瀬）、二五二～二五三・二七八番（遠間）、二五四～二五六・二六九～二七三・二九六～二九八番（森田）、二七六～二七七・二七九～二八一番（谷崎）

凡例

一 本注釈は、資経本（冷泉家時雨亭文庫編『資経本私家集二』朝日新聞社二〇〇一年所収）を底本とする。

二 本文の校合に用いた本は、以下の通り（一）内は、異同を掲出する際の略称。

宮内庁書陵蔵本（510・12）（御）※原稿中では、御所本と称す。

西本願寺本（西）

前田家旧蔵 現出光美術館蔵 伝西行筆本（前）

奈良女子大学蔵歌仙家集本（歌）

三 和歌本文は読解の便のため、適宜仮名を漢字に、漢字を仮名に改めた。また、詞書内には必要に応じて句読点を施している。校訂した箇所や仮名漢字表記を改めた箇所は、右にルビで底本での表記を示した。

四 底本を校合本によって校訂した箇所は、「語釈」もしくは、「補説」に、その理由と共に明記した。

五 歌の解釈に問題点が少なく、「異同」「他出」「語釈」を記さない歌に関しては、校訂本文と「通釈」のみを記載する。

六 本注釈に頻出する先行研究論文は、以下の略称を用いる。

① 稲賀敬二氏『女流歌人 中務―歌で伝記を辿る―』（新典社 平・二二）↓『女流歌人中務』

② 木船重昭氏『中務集相如集注釈』（大学堂書店 平・四）↓『木船注釈』

③ 平野由紀子氏『信明集注釈』（貴重本刊行会 平・一五）↓『信明集注釈』

二四〇・二四一番歌

ある人忍びたる所にて物語するに郭公の鳴けは

今宵こそしでの田長も聞きつなれ今や五月の空に知られん

返し

ほととぎす聞きわたるとも五月雨の空言にだに人はなさん

〔異同〕 しのひける所にてものかたりするに↓しのひてもものいふほとに（西・歌）しのひてもものいふに（前）、郭公のなけは↓ほと、きすのなきければ（西）、き、つなれ↓き、つめれ（西・前）、返し↓返事（西）、き、わたるとも↓き、わかるらん（西）き、わたるとも（前）、そらことをたに↓そらをいまたに（西）そらとひと、き（前）そらことにたに（歌）、人はなかなん↓人はなさん（西）き、もなさん（前）人はなさん（歌）

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○ある人 源信明。家集から中務との親密な交渉が伺える。二四〇番歌以降頻出する。○しでの田長 ほととぎすの異名。○五月の空に知られん 「五月雨の空もどろに郭公なにを憂しとか夜ただなくらむ（古今・夏・一六〇 貫之）」のように五月は長雨の季節として詠まれる。「空に知る」は、それとなく・自ずと知られるの意「から衣うつこゑきけば月清みまだぬ人を空にするかな（貫之・一一五）」。「○空言にだに」「空」と「虚、作り言」との掛詞。○人はなさん 底本のままでは歌意がとり難いため歌仙本・前田本によって改めた。

〔通釈〕 ある人が人目を忍んだ所で語らっている時、ほととぎすが鳴いたので

今夜こそはほととぎすも聞いてしまったようです。今こそ、自ずと私達の仲も世間に知られることでしょうか。

返し

ほととぎすが二人の語らいをずっと聞いていたとしても、世間の人達には、偽りとでも思つてほしいものです。

二四二・二四三・二四四番歌

語らふ人、物など言ひて

うつつとも夢ともなくて明けぬるをまたはいづれの夜にか見るべき

女、返し

また見べき夢もうつつもありやとて起き臥しまどふ身とは知らずや

夢にても思ひおかずはなかなかに見て忘れなんことのわびしさ

〔通釈〕 親しく交際している人が、言葉などを交わして

現実とも夢ともわからずに夜が明けてしまいました、今度はいつの夜にお逢いできるのでしょうか。

女、返し

再びお逢いできる夢も現実もあるだろうか、ありはしないと、起き上がった横になったりして思い乱れているわが身と、あなたはご存じないのでしょうか。

たとえ夢でお逢いしたとしても、あなたが私にお心をとどめないのでしたら、お逢いするとかえつて私をお忘れになってしまうでしょう、そのことが何ともつらいのです。

二四五番歌

こと人なるべし。忍ぶるに

うつつには心も心寝ぬる夜の夢ともゆめと人にかたるな

〔異同〕 こと人なるへししのふるに↓また人（西）又ひとに（歌）、うつ、には↓うつ、にも（歌）、こゝろもこゝろねぬるよの↓心はねぬる

よの夢と（歌）

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○こと人 前歌までとは別の男性か。○うつつには「うつつ」と「夢」を詠み込む場合、「現実には逢えないから夢で逢いたい」というような詠まれ方は多いが、当該歌は後朝の歌。「うつつには臥せども寝られず起きかへり昨日の夢をいつか忘れん（後撰・恋五・九二五 よみ人しらず）」。○心も心「心」を強調した表現。○寝ぬる夜 共寝をした夜。下に続く「夢」と併せて、共寝をした夢のような夜の意。「寝ぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなにもなりまさるかな（古今・恋三・六四四 業平）」。○夢ともゆめと人にかたるな「ゆめ」に「夢」と副詞「ゆめ（決して）」を掛ける。「ゆめとても人に語るな知るといへば手枕ならぬまくらだにせず（伊勢・三三三）」。

〔通釈〕 他の男であろう。人目につかないように密かに逢った時に

現実では心の中だけに秘めて、共寝をした夢のような夜を、たとえば夢の中でも決して人に語らないでください。

二四六・二四七番歌

誰ともなし。男

時雨にも雨にもあらで君こふる我が衣手の濡るるころかな

返し

濃さまさる紅葉ならねば濡るなれど色の深さもしられざりけり

〔異同〕 たれともなしおとこ↓又人に（前）又ひと（西・歌）、あめにも↓つゆにも（前・歌）、あらで↓てへて（西）、返し↓返事（西）、ならねは↓ならねと、ぬるなれと↓ぬるれとも（西）ぬるらめと（歌）

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○誰ともなし 元の資料に誰からの歌か記されていない。○時雨にも雨にもあらで 「涙」を暗示させる。「時雨にも雨にもあてじ徒に年のふるにぞ袖はぬれける（西宮左大臣・四五）」。○君こふる 「恋ふる」の「ふる」に「降る」を掛ける。「しぐれにも雨にもあらで君こふる年のふるにも袖はぬれけり（拾遺集・恋一・六八八 よみ人しらず）」。○衣手 底本は「こ□もて」とあるように、「ろ」は筆の跡があるものの、おそらく虫損によると思われる、文字の判断が難しい。御所本により「衣手」とした。○濃さまさる紅葉ならねば 贈歌の暗示する涙を紅葉として表現した言い方。「濃さまさる涙の色もかひぞなきみすべき人のこの世ならねば（伊勢・二五九）」。○濡るなれど 「なれ」は伝聞の助動詞。同時代・前時代に類例が見出しがたい表現。○色の深さ 紅葉の色が濃い意味に紅葉の色が深い意を重ねる。

〔通釈〕 誰からの歌か記されていない。男から

時雨でも雨でもなくて、あなたを恋慕う涙で、私の袖が濡れているこの頃ですよ。

返し

紅の濃さがまさる紅葉ではないので、濡れているというけれど、紅の涙の色の深さも知ることができないことです。

二四八・二四九番

男

萩の枝の色づくだにもあるものを心すこくも風の吹くかな

返し

寝ねがてになるべき頃の風の音は萩の葉ならぬ身にもしみけり

〔異同〕 おとこ↓秋いたく風吹日人に（西）あきいたくかせふくにひとに（前）秋風いたうふくひ（歌）、はきのえの↓あきはきの（西・前）はきののはの（歌）、こ、ろすこくも↓こ、ろほそくも（前）、返し↓返事（西、前）、いねかてになるへき↓いねかてになり行（歌）、ころの↓きみか（西）ほと（前）

〔他出〕 麗花・秋下・五九（二四八・作者は中務）、秋風・秋歌下・三五七（二四八・作者は中務）

〔語釈〕 ○萩の枝 「萩の枝」は一般に「露」がついてその重みで撓むさまが詠まれ、「色づく」と詠まれるのは萩でも「下枝・下葉」である。また、萩の下枝が「色づく」と詠まれる場合は、多く恋の心を含む。「秋

萩の下葉色づく今よりや一人ある人の寝ねがてにする（古今・秋上・二二〇 よみ人知らず）。当該贈答歌もこの『古今集』二二〇番歌を踏まえていよう。○色づくだにもあるものを 動詞「あり」は代用語。萩の下葉が色づいて枯れ始め、一人寝をする人が眠れない時季でさえあるのに、の意。「雪とのみ降るだにあるを桜花いかに散れとか風の吹くらむ（古今・春下・八六 躬恒）。○心すごくも「すごし」はぞつとする感じを言う。和歌での用例は多くはない。○寝ねがてになるべき「寝ねがて」は寝ることができない意。「寝ぬ」の連用形に「耐える」意の「かつ」が付いたもので、「かつ」が濁音化すると共に「難し」の意と考えられた。ここは、きつと寝ることが難しくなるにちがいない、の意か。歌仙本では「なるべき」が「なり行く」とあり、そのほうが解釈しやすい。○萩の葉 萩は和歌では多く「風」と共に、音をたてるさまが詠まれる。「いとどしく物思ふ宿の萩の葉に秋とつづける風のわびしさ（後撰・秋上・二二〇 よみ人知らず）。『補説』参照。

【通釈】 男から

萩の下枝が色づいて秋も深まり、一人寝をする人が眠れない時季でさえあるのに、更にぞつとする感じに風が吹いて、あなたに冷たく扱われて、私は一層つらいことです。

返し

誰もが寝ることができないに違いないこの頃の風の音は、萩の葉ではないので音をたてない、便りもしない我が身にもしむことです。

【補説】 他本では、秋風が強く吹いた日の遣り取りとして、二四八番歌が中務、二四九番が相手の返歌であり、他出でも二四八番歌は中務詠とされる。底本のみが、男からの歌に中務が返歌した形で扱っている点、不審ではあるが、ここは底本に従って解釈しておく。例えば西本願寺本

では、返歌の上句は「寝ねがてになるべき君が風の音は」となっていて、この場合は、中務が「ただでさえわびしい独り寝の床に、ぞつとするほど冷たい風が吹くようなあなたの態度ですわね」と恨むのに対して、男が「眠れなくなるに違いないあなたの風の音、あなたのお便りは、秋風に吹かれて音をたてる萩ではない、あなたに飽いたりしていない私の身にもしみることだ」となだめた格好になり、男女が逆であつても解釈は成り立つ。また、この贈答は風を歌う点では共通するものの、贈歌が萩を用いて恋に悩むさまを言うのに対して、返歌が萩で対応していることが珍しい。加えて、「萩の葉」を詠む歌として、『後撰集』で中務詠として載る次の歌との関係についても気になってくる。

平兼材がやうやうかれがたになりにはれば遣はしける 中務
秋風の吹くにつけてもとはぬかな萩の葉ならば音はしてまし

（後撰・恋四・八四六／古今六帖・三七二一）
こちらの「秋風の」の歌は、第二句が「吹く折にしも」の形で、西本願寺本の二三〇番歌、末尾の増補とおぼしき部分に、詞書の無い形で見えるもの。「萩の葉だつたら秋風が吹いたら音をたてるものよ、私に飽きたとしても便りぐらくれてもいいでしょうに」と男を恨む歌である。

二五〇・二五一番

又人

返し

はかなくておな こころ同じ心になりにしをおも思ふがおもことは思ふらんやぞ

わびしきを同じ心と聞くからに我身を捨てて君ぞかなしき

〔他出〕後撰・恋一・五九四（作者は中務）／五九五（作者は信明）、
信明・九二（作者は女）／九三（作者は信明）

〔通釈〕 また、人から

将来も不確かなままに深い仲となってしまうたものを、私があなたを愛するようには、あなたは私を愛しているでしょうか、いやそうではありませんまい。

返し

思い通りにならない恋路をあなたも同じように辛いと思っていると聞いただけで、我が身を棄ててもあなたが愛おしいことです。

〔補説〕 この贈答も、他出では男女が逆であるが、底本に従った。なお、西本願寺本でも、底本と同様、男からの歌に中務が答えた形と読める。

二五二・二五三番歌

また人

沢水の心を知れる君ならば常よりまさる今日を訪はまし

返し

まさるらん汀のほどを知らねども淀をばまづぞ思ひ出でつる

〔異同〕 さは水の↓川水の（歌）、きみならは↓きみなれは（西）、けふをとをまし↓けふをしらまし（西）けふをととはなん（歌）けふそといはまし（前）、みきはのほどを↓みきはのほとも（西）みきはのほととは

（前・歌）、やとをはまつそ↓よとのはまへそ（西）よとむはまへそ（歌）まとをはまへそ（前）

〔他出〕 なし

〔本文校訂〕 底本二五三番歌の第四句は「やどをばまづぞ」だが、唐突にもち出される「宿」の意を解しがたい。『古今集』所収歌との関連性を想定すると、答歌には「宿」ではなく「淀」が詠みこまれたのではないかと想像される。よって、西本願寺本により「やど」を「よど」と校訂した。詳しくは「補説」。

〔語釈〕 ○沢水の心 雨が降るなどして沢の水かさが増すように募る恋心。『古今集』所収歌を想起させる語。〔補説〕参照。○淀 水の流れがよどんでいるところ。恋歌においては、男女の行き来が滞ることにたとえられる。「淀川」のよどむと人を見るらめど流れて深き心あるものを（古今・恋四・七二一 よみ人しらず）。

〔通釈〕 また、ある人から

沢の水かさが増すように募る私の心を分かって下さるあなたならば、その恋心がいつも以上にまさっている今日、あなたもとをお訪ねしますのに。

返し

常よりも水かさが増しているという汀にたとえたあなたのお心ほどの程度か分かりませんが、「沢水」と言えばまず、「淀」が思いつきこされます。あなたの訪れも滞っておりますこと。

〔補説〕 当該歌は、

真孤刈る淀の沢水雨降れば常よりことにまさるわが恋

（古今・恋二・五八七 貫之）
を本歌とする贈答と考えられる。つまり、贈歌で男が、「かの古今集歌

のごとく、私の恋心は募っているのに、あなたはそれを分かって下さらない」と恋の煩悶を訴える。対して女は、本歌では淀川を指す「淀」を「よどみ」の意で摂取して、「かの古今集歌といえは「淀」が思い起こされますが、水のよどみのように、あなたはなかなかいらつしやいませんね。」と切り返したものと考え、通釈を呈した。

二五四番歌

思ふことある、人に

あるよりも乱れまさりて海人の刈るもの思ひすと君は知らじな

〔異同〕 詞書↓おもふことあるころ人に（西・前）おもふ事ある比（歌）、あるよりも↓ありしより（前）、あまの川↓あまのかる（西・歌・前）、ものおもひすと↓ものおもひすとも（西）もの思ひすとは（歌）ものおもふみとも（前）、しらしな↓しらすや（西）しるやは（歌）

〔他出〕 新勅撰・恋四・八九〇

〔本文校訂〕 底本第三句は「天の川」だが、歌意を解し難いため、他本により「海人の刈る」と改める。

〔語釈〕 ○乱れまさりて海人の刈る もの思いに乱れる様子を、藻の乱れ絡まる様子に喩える。「いく世しもあらじ我が身をなぞもかく海人の刈る藻に思ひ乱るる（古今・雑下・九三四 よみ人しらず）。ただし、「藻」が語頭に重なる形で「もの思い」が引き出される例は、先行・同時代の詠に見出し難い。

〔通釈〕 もの思いすることがあって、人に

海人が刈る藻が乱れ絡まるように、私が以前よりも、もの思いに乱

れているとは、あなたはご存じないでしょうね。

二五五・二五六番歌

ある男

かくしつゝ世をや尽くさん陸奥の阿武隈川をいかで渡らん

返し

阿武隈を渡りもはてぬものならばそはなかに我いかにせん

〔異同〕 あるをとこ↓ある人（西・前・歌）、あふくま川を↓あふくまかは、（西）、いかて↓いか、（西・前）、わたらん↓わたらぬ（西・前）、あふくまを↓逢ふことを（歌）、そは↓かは（前・歌）、そはなか／＼に↓はかな、／＼に（西）

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○かくしつゝ世をや尽くさん 「世」は「夜」との掛詞。恋人に会えないまま二人の仲が終わることと、夜を過ごすこと。当該歌は次の『古今集』の歌に影響を受けたか。「かくしつゝ世をや尽くさむ高砂の尾上に立てる松ならなくに（古今・雑上・九〇八 よみ人しらず）。○陸奥の阿武隈川 阿武隈川は、「阿武隈」の「あぶ」に「逢ふ」を掛け、恋歌に用いられるのが一般的。「世とともに阿武隈川の遠ければそこなる影を見ぬぞ侘びしき（後撰・恋一・五二〇 よみ人しらず）。○なかなか 中途半端で。「逢ふことの絶えてしなくはなかなか人に身をも恨みざらまし（朝忠・三五）」。

〔通釈〕 ある男が

このように逢えない夜を過ごしたまま、あなたとの仲を終えるのだろうか。いや、どうにかして逢いに行きます。

返し

あなたが阿武隈川を渡るような困難な状況を乗り越えてくださらなければ、そんな半端なお気持ちでは、私にはどうしようもありませんよ。

二五七番歌

信明、年月おほかりけれど、少しをぞ

かくてなほ憂き世に命堪へたれば頼まぬ君も待たむと思ふ

〔異同〕 詞書↓なし(西・歌)、□□かりけれど↓おほかりけれど(御)、

かくてなを↓かくてのみ(西)、うきよにいのち↓うき身のちの(西)うきに命の(歌)、たえたれは↓たへたれは(西・歌)、たのまぬきみも↓ためぬよ、まで(西)たのめぬよにて(歌)

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○信明 二四〇番既出。○年月おほかりけれど 底本の不鮮明箇所を御所本にて校訂。歌の贈答など交際が長い年月に及んでいることを言ったものか。○少しをぞ 逢瀬が少なかったことを言ったものか。〔ぞ〕の下には「詠みておこせける」といった語句を補って解すべきか。○かくてなほ 「かくて」の内容は、詞書を受けて、交際年月は長くても逢瀬の少ない状態を言ったものか。「なほ」は、「そうはいってもやはり」の意。「年を経て消えぬ思ひはありながら夜の袂はなほ凍りけり(古今・恋二・五九六 友則)」。○憂き世 つらい世の中。ここではままな

らない男女の仲をいう。「うき世とは思ふものから天のとの明くるはつらきものにぞ有りける(後撰・恋六・九九六 よみ人しらず)」。○命堪へたれば 底本の表記によると「命絶えたれば」となるがこれでは解釈が困難である。よって西本願寺本・歌仙本により校訂した。○頼まぬ君 相手の愛情が頼りにならないことを言う。「君来むといひし夜ごとに過ぎぬれば頼まぬものの恋ひつつぞ経る(『伊勢物語』二三段)」。ここでは、長年のつきあいでありながらも逢つてくれなかったことを言うか。

〔通釈〕 信明が、年月を多く過ごしてきたけれども、逢瀬は少しであったということを詠んで送ってきた

このような状態であってもやはりつらい世で私は生きながらえているので、愛情を頼りにできないあなたも私のことを待たうと思ひます。

〔補説〕 当該歌は、詞書に「信明」と贈答相手が具体的に記されているが、『信明集』には採られていない。当該歌の前後には、信明との贈答が配列されているが、『信明集』とは配列が異なる。また、次の二五八番歌との間に緊密な言葉の対応が見られず、贈答関係を認めることはできない。

二五八番歌

女

かからんと思はぬほどの夢路にもつらき心は見えじと思ふ

〔異同〕 詞書↓なし(西・歌)、おもはぬほとん人の(西)・

おもはん程に（歌）、つらきこゝろは↓つらきこゝろを（西）

〔語釈〕 ○かからん 「かくあらん」の約。「このようなものだろう」の意で、「かからん」の内容は男女の仲が思うようにならないことをいうか。○つらき心 つれない心。「津の国の生田の池のいくたびかつらき心を我に見すらむ（拾遺・恋四・八八四 よみ人知らず）」。

〔通釈〕 女から

どうせ男女の仲はこのようなのだろうと思わない頃の夢の通い路でも、つれない心は見せまいと思います。

〔補説〕 西本願寺本では、当該歌の次に底本にはない歌を配置し、その後二五七番歌の歌を配している。西本願寺本でも当該歌の前後の歌との贈答関係は認められない。

二五九番歌

男

ありしよりつらき心のまさらなむかひなきよりは絶えてやみなん

〔異同〕 □□□なん↓まさらなん（御）、□□□□□りは↓かひなきよりは（御）、た□てや□なん↓たえてやみなん（御）（底本・御所本のみ）の所収歌

〔他出〕 信明・一〇二

〔本文校訂〕 底本の不鮮明箇所を御所本にて校訂した。

〔語釈〕 ○男 『信明集』では、「女」の歌。「補説」参照。○ありしより 昔よりも。「忘るらむと思ふ心のうたがひにありしよりけにものぞ悲しき（『伊勢物語』二十一）」。○かひなきよりは 「かひなき」は、

女をどんなに想っても甲斐がない意。

〔通釈〕 男から

昔よりも冷淡な心がまさってほしい。逢瀬を期待しても甲斐がない状態が続くよりはあなたとの関係を断ち切って終わりにしてしまいたいと思うから。

〔補説〕 つれない女の態度に苦しみ、いつそのこと冷たさが前よりも増さってほしいと願う。そうなることによつて女への想いを断ち切つてしまいたいと、いつまでたつても逢おうとはしない女の冷たい態度を恨んで、女との逢瀬に一縷の望みをかける。『信明集』では女の歌となっているが、いずれが本来の形であるかは決定しがたい。

二六〇番歌

女

はつかにてみそかならんと思ほえず後やよそかにならんと思へば

〔異同〕 詞書↓をんな（御）（底本・御所本のみ）の所収歌

〔他出〕 信明・七八

〔本文校訂〕 底本の不鮮明箇所を御所本にて校訂した。

〔通釈〕 女から

わずかでも人目をしのんで逢おうとも思いません。二十日が過ぎて三十日になり、やがて四十日になるように、逢った後にはあなたはよそよそしくなると思いますから。

〔補説〕 当該歌は、前の二五九番歌との間に言葉の対応が見られず、贈答の体をなしていない。『信明集』をみると当該歌の前に「はやくこの

かみの十日も過ぎななむはつかにてだにみそかなりやと」という歌がある。信明の贈歌と見られ、十日、二十日、三十日を詠み込み、二十日と三十日に「僅か」「密か」を掛けて、わずかでもいいから人目をしのんで逢ってほしいという想いを訴えている。これに対する中務の答歌が当該歌で、二十日、三十日、さらに四十日を詠み込み、四十日に「よそよそしい」「疎遠である」意の「余所」を掛けて逢った後の不実を疑い、逢わないという意志を示して切り返したことになる。『信明集注釈』では、当該歌を含む『信明集』の贈答歌に関して「贈歌と答歌の呼応は緊密で、もとは『信明集』の伝えるような一対のかたちであつたろう」と指摘している。

二六一・二六二番歌

男

君恋ふる涙の袖に満ちぬれば我よりほかに人や知るらん

返し

我が恋ふる涙ながらも身に添ひてうしろめたくも漏らすなるかな

〔異同〕 男↓またひと（西・歌）又（前）、なみたの↓なみたも（西・歌）、みちぬれは↓もりぬれは（西・前・歌）、ほかに↓後の（歌）、返し↓かへ事（西）、人↓わか（西・前・歌）、なみたなからも↓なみたちつ、も（前）涙ならでも（歌）、うしろめたて↓うしろめたく（西・前・歌）、もらすかな↓とらすかな（西）

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○我が恋ふる 底本は「人恋ふる」。歌意がとり難いため他本により校訂。贈歌の「君恋ふる」と対をなす表現。○身に添ひて あなたの身から離れないで。

〔通釈〕 男から

あなたを恋慕って流す涙が袖に満ちてしまったので、私以外の人も私があなたに恋をしていることを知ってしまったでしょうか。

返し

私があなたのために流した涙もろともあなたの身に添って、あなたときたらやましくもそれをよそへ漏らしてしまったのですね。

二六三・二六四番歌

男

身の上も人の心も知らぬ間はことごとくねをのみぞなく

返し

君だにもことごとくもなき涙をばいかに知りてかあはれと思はん

〔異同〕 おとこ↓又、人（西・歌）ナシ（前）、ことごとくもなく↓ことごとくをなき（歌）ことごとくもなき（西）、ことごとくもなき↓ことごとくらぬ（前・歌・西）

〔他出〕 信明・二六三、二六四、新勅撰・恋四・八八九（二六三）

〔語釈〕 ○ことごとくもなく どうしようもなく。「秋の夜も名のみなりけりあふといへば事ごとくもなくあけぬるものを」（古今・恋三・六三五小野小町）。

〔通釈〕 男から

自身がどうなるのかもあなたの心もわからない間はどうしようもなく声をあげて泣くばかりです。

返し

ご自身ですら「どうしようもない」という涙を、どのようにしてお察しして哀れと思いましょるか。

二六五・二六六番

男

人やりに思ふことにもあらなくに身もいたづらになりぬべきかな

返し

身を□□やみぬと見ばやいたづらになりぬ□□ぞ誰も惜しまむ

〔異同〕 なし（底本・御所本のみ所収歌）

〔他出〕 信明・六四く六五

〔語釈〕 ○人やり 自分の意志ではなく、他人に強いられること。「人やりの道ならなくにおほかたはいき憂しと言ひていざ帰るなむ（古今・離別・三八八 源実）」○身を□□ 『信明集』では「身を捨てて」。○やみぬ 『信明集』では「思ふ」。○見ばや 『信明集』では「見しは」。「ばや」は仮定条件を作る「ば」＋疑問の係助詞か。「別れては程を隔つと思へばやかつ見ながらにかねてこひしき（古今・離別・三七二 在原滋春）」ただし「見ばや」という形は他例が乏しい。また、「ばや」を希望の終助詞と見ることも不可能ではない。「恋ひしき

を慰めがてら試みにかへして見ばやせなが袖をも（好忠集・四七二）。○なりぬ□□ぞ誰も惜しまむ 『信明集』では「なるべきことにかたれもせむ」。

〔通釈〕 男から

人から無理にさせられたのではなく、自分からあなたを恋しく思つてのことなのに、我が身も空しくなつてしまひそうなほどに苦しいことです。

返し

あなたが身を……終わつてしまふと見るならば、空しく死んでしまひ……誰も惜しむでしうか。

〔補説〕 この贈答と次の贈答の四首は、『中務集』他本には無く、相手の信明の家集には見える歌。返歌に判読不能の箇所がある。それを『信明集』を参考に補つて読むならば、「あなたが恋に身を捨てて命も果ててしまふと見るならば、空しく死んでしまひそうなことを誰もが惜しむでしうか」の意か。或いは、「ばや」を願望と考える場合には、「あなたが恋に身を捨てて命果ててしまふのを見たいものです。恋ゆえに空しく死んでしまひそうだと誰もがあなたを惜しむでしうから」の意か。

二六七・二六八番

男

涙とも雨とも分かずおほかたの降れば降るとぞ人は見らん

返し

涙^{なみだ}とも知らぬ先^{さき}よりむべこそは常^{つね}より異^{こと}にながめられけれ

〔通釈〕 男から

私はあなたが恋しくて泣いているのに、あなたは涙とも雨とも見分けることなく、一般的に時節で降る雨とばかり見るのでしょうか。

返し

降るのはあなたの涙だとも知る前から、なるほど仰るとおり、いつもより格別に物思^{ものおも}いしてしまう長雨です。

二六九・二七〇・二七一 番歌

人の「来^こん」と言^いひて来^こぬに

契^{ちぎ}りけん日^ひをも過^すぐさぬ七夕^{たなばた}は我がごとく憂^{うれ}くは思^{おも}はざらん

返し

七夕^{たなばた}の契^{ちぎ}りけん日^ひは過^すぎぬともたとふべしやはこともゆゆしく

また

ゆゆしとも思^{おも}はざりけん七夕^{たなばた}の忘れぬ仲^{なか}のあらまほしさに

〔異同〕 こんといひて↓こむとて（西）、こぬに↓こねは（西・前）、日をも↓人を（西）、わかごとく↓わかと（西・前）、うくは↓かくも（西）にも（歌）ナシ（前）、おもはざらん↓ナシ（前）、すきねとも↓すくすとも（西・前）過ぬとも（歌）、さりけん↓さりけり（西・前）さんけん（御）

〔他出〕 信明・八二―八四

〔本文校訂〕 底本二七〇番歌の第三句は「過ぎねども」。贈答内容から考えて、約束の日が過ぎていなければつじつまが合わない。歌仙本により「過ぎぬとも」と改めた。

〔語釈〕 ○日をも過ぐさぬ 「約束の日すら牽牛と過ごせない織女は」の意。○こともゆゆしく 年に一度しか会えない牽牛・織女に、自分たちを準備するのは不吉だと言うこと。「おほかたに思へばゆゆし天の川今日の逢瀬はうらやまれけり（紫式部・一一〇）」。

〔通釈〕 ある人が、「訪ねます」と言っていたけれども、来なかったので年に一度約束した日すら牽牛と過ごせない織女は、あなたに忘れられた私ほどには辛く思わないでほしいものです。

返し

約束した日が過ぎてしまっても、私とあなたの仲を七夕にたとえるべきではないでしょう。よりもよって不吉です。

また

不吉だとは思わないでしょう。年に一度とはいえ、毎年会う日を忘れない理想的な牽牛・織女の仲なのですから。

〔補説〕 「他出」に記したように、当該贈答は『信明集』にも収載されているが、詠み手の男女が逆になっており、和歌そのものにも異同がある。さらに、三首目への返歌として、

数ならぬ心のうちにいとどしく空さえ許す頃のわびしさ

が収載されている。すなわち、一首目で逢ってくれない女を男が責め、女が「七夕に自分たちをたとえるなど不吉だ」と返す。対して三首目で男が七夕の理想性を詠み、女が「年に一度七夕の頃には、我が身が一層苦しく感じられる」と返すのである（解釈の詳細は『信明集注釈』を参

照のこと）。

『信明集注釈』は、「ほぼ同一の歌が、男の歌、女の歌として入れ替わることは、当時の贈答を見ると珍しくない」と解説する。

二七二・二七三番歌

秋あきごろ月のあかきあきに、人

恋こひしさは同じ心こゝろにあらずとも今宵こよひの月つきを君見きみざらめや

返し

さやかにも見るべきものを我われはただ涙なみだにくもる折をりぞおほかる

〔異同〕 あきころ↓秋のよの（西）、月のあかきに↓つきあかきに（西・

前・歌）、こひしさは↓こひしさは（歌）、□し↓返事（西・前）返し

（御・前）、さや□□□□るへき↓さやかにもみるへき（西・前・歌）、ものを↓つきを（西・前）、おほか□↓おほかる（御・西・前・歌）

〔他出〕 信明・一一三―一一四、拾遺抄・三六三―三六四、拾遺集・恋

三・七八七―七八八、三十人撰・八二（贈）一二五（答）、三十六人撰・

九九（贈）一四五（答）、俊頼髄脳・四五（贈）一八九―一九〇、和歌

色葉・六六―六七、八雲御抄・八二（贈）、和歌肝要・一二（贈）、和歌

大綱・三（贈）、悦目抄・三六（贈）、定家八代抄・一三七九―一三八〇

〔本文校訂〕 二七三番の、判読困難な欠損部分を他本により補った。

〔語釈〕 ○同じ心 同等の恋心の意。底本二五〇―二五一番歌に既出の

表現。他に「ひとりのみ思へば苦しいかにして同じ心に人ををしへん

（忠岑・一五七）」など。○今宵の月を君見ざらめや「同等の恋心を抱

くことはなくとも、今宵の月を見れば同じ情意を分かち合える」の意か。○涙にくもる 月の「さやか」と対照的に、涙で目が「くもる」と表現。「さやかにも人は見るらん我が目には涙にくもる宵の月影（和泉式部続・一三〇）」。

〔通釈〕 秋ごろ、月が明るく照り輝いている時に、男から

私の恋心とあなたの気持ちが同等でなくても、あなたはきつと今夜の月を見ていることでしょう（そうすれば、同等の感動を持って情趣を分かち合えるはずです）。

返し

明るくはつきりと見えるにちがいない今夜の月ですが、私の目はただただ涙でくもる時が多く、月を見ることができないのですよ。

〔補説1〕 他出の『信明集』一一三―一一四番によれば、当該贈答は中務が小野宮（藤原実頼邸）に居た頃交わされたものと考えられる。『信明集注釈』は、詞書の「小野宮に候を聞きつけて」を受け、一時男は女の居場所が分からなくなっており、ようやく居場所を探し当てたかなどと推察している。

また同注釈では『後撰集』に、「左大臣につかはしける」と、中務が左大臣（実頼）に贈ったとされる歌「ありしだに憂かりしものを飽かずとていづこに添ふる辛さなるらん（後撰・恋五・九五二）」が見えることに触れ、「この歌を見るかぎり、実頼とのつらい恋を中務が嘆く関係だったらしい。とすれば、召人のように中務が実頼の邸に迎えられ、信明が逢うことは難しい状態であったとも考えられよう」と論じる。

中務と実頼が恋愛関係にあったことは、『清慎公（実頼）集』七六―八一番歌に所収された贈答歌からもうかがえる。

『女流歌人中務』は、この贈答の内七八―七九番が『新古今集』（恋四・

一二三四（一二三五）に、

中將に侍りける時、女につかはしける 清慎公

よひよひに君をあはれと思ひつつ人には言はでねをのみぞなく

返し

読人しらず

君だにも思ひいでけるよひよひを待つはいかなる心地かはする

と、収載されていることから、実頼が中将だった延長六（九二八）年六月以降、承平三（九三三）年ごろまでのことと推測している。この推測のごとく、『新古今集』の詞書に全幅の信頼を寄せるならば、当該贈答は、中務が十代後半から二十歳ごろまでの出来事になる。信明との間の娘・井殿の誕生も同時期と推され（『女流歌人中務』）、信明・実頼と中務の交際は、同時進行的か、かなり近接する時期だったと考えられる。また、中務には実頼の兄弟である師輔との交渉も知られる（『九条右大臣（師輔）集』『新古今集』など）。

『補説2』 当該贈答は底本を基本とすれば、つれない女に男が「名月によつて心が通じ合うはず」と贈ってきた歌に、女が「あなたが冷たいので、涙にくれて月など見えません」と返したものと読める。

しかし『信明集』では、実頼と恋仲にある中務に、信明が「あなたはもはや私に恋してはくれまいが、月を眺めれば同じ情趣を感じるはず」と詠みかけたものと取れ、中務の返歌は、実頼との恋の苦しさを信明に伝えたものと考えられようか。『信明集』を基本として読むと、贈答に込められた互いの心情は複雑で、中務が涙にくれているのはなぜなのか、その理由が読み取りにくい。

二七四・二七五番歌

年としごろありて、人きて帰かへりて

衣ころもだに隔へだてし夜半よわ、うは憂うれかりしにすだれの内うちの声こゑぞ恋こひしき

返し

内外うちとなくなりもしなまし玉たますだれ何年なんじし月をへだてそめけん

『異同』 人きてかへりて↓人きて返して（西）人にわかれて（前）すて返て人（歌）、へたてしよわ、↓へたてしよは、（御）へたてしよひは（西・歌）なかにありしは（前）、うかりしを↓うかりしき（西）うとかりに（前）、こひしき↓かなしき（西）、なりもしなまし↓なれもしなまし（西）、なにとし月を↓たれとしつきを（西・前・歌）

『他出』 拾遺集・恋四・八九八（二七五）

『語釈』 ○年ごろありて 数年経って。○人 前後の歌との繋がりからすると信明のことか（二四〇番既出）。○衣だに隔てし夜半 衣だけが二人を隔てた夜。「衣だになかに有りしはうとかりきあはぬ夜をさへへだてつるかな（拾遺集・恋三・七九八 よみ人しらず）」。○すだれの内の声 簾越しの声。御簾越しの対面は他人行儀。○内外なくなりもしなまし 「内外なく」は内と外の区別なく、の意。他例が少ない表現。「内も外もみえぬあふぎのほどなきに涼しき風をいかでこめけむ（頼基・一七）」。○玉すだれ 簾の美称。

『通釈』 数年経って、人が訪ねて来て帰ったのちに

衣だけが二人を隔てた夜でさえ苦しかったのに、簾に隔てられて聞

くお声が恋しかったことだ。

返し

御簾だつたら内と外の区別がなくもなるでしょうに。あなたはどうかして年月を隔てて、私たちの仲を隔てはじめてたのでしょうか。

〔補説〕 二七五番歌の四句は、底本では「なにとし月を」であるが他本と他出はすべて「誰年月を」の本文である。その場合、「玉すだれ」は「玉すだれ誰こめてのみ寝し時はあくてふ事も知られやはせし（和泉続・一五四）」のように、同音反復で「誰」を導く序詞的な役割で用いられている。表現としては「誰」の方が穏当であるが、ここでは底本のままで解釈した。

二七六・二七七番歌

また

あひも見ぬ心地は言はん方もなし誰がつけそめし病なるらん

返し

我をこそ世にも苦しと思ひしか人はいかなる心地なるらん

〔異同〕 なし（底本・御所本のみの所収歌）

〔他出〕 信明・八六〇八七

〔語釈〕 ○あひも見ぬ心地 ここでの「心地」は恋の病の病状をいう。お会いできない時の私の恋煩いの意。○誰がつけそめし病なるらん「病」の「ひ」に「火」の意を響かせ、「つけそめ」と対応させていると考えられる。○人 信明と考えられる。

〔通釈〕 また

お会いできない時の私の恋煩いは何とも言いようがありません。いったい誰が私につけはじめた病なののでしょうか。

返し

私こそが、世の中で一番に苦しいと思っていたのですが、「病」などとおっしゃるあなたの恋煩いは、一体どの程度の病状なのでしょう。〔補説〕 木船注釈では「付け染め」と「付け初め」、「病」と「山藍」を掛けるとしている。しかし、「十一月臨時祭／足曳の山ゐの色はゆふだすきかけたるきぬのつまにざりける（貫之・四〇八）」のように、「山藍」はほとんどが賀茂祭などに際して詠まれており、二七七番の答歌には「山藍」と照応する表現が見いだせないため、当該贈答歌とは関連性が薄いと考える。

また、他出の『信明集』では贈歌と答歌が入れ替わって収載されているが、『信明集注釈』では『中務集』の形は、贈歌と返歌が逆であつて「あひもみぬ」が男の贈歌となる。この方が自然ではないかと指摘されており、穏当な見解だと思われる。

二七八番歌

男

夜見よし風も涼しくなる頃は心ことにて待たじとやる

〔異同〕 なし（底本・御所本のみの所収歌）

〔他出〕 信明・九四

〔本文校訂〕 初句は底本・御所本ともに「夜見よし」とあるが、歌意を

解しがたい。『信明集』（書陵部蔵五〇一・一一七）には「やみよ、し」とある。この本文から、底本では平仮名「やみ」の字母が漢字として書写され、さらに「やみよ、し」の踊り字の誤脱が生じたかと推測されるため校訂した。

【語釈】 ○闇夜よし 「補説」参照。○風も涼しくなる頃 秋の到来とともに涼風が吹くという発想（『礼記』『月令』）をふまえる。○心ことに 秋の到来を感じさせる涼風に格別な趣を覚えるということ。また、「こんな夜は、あなたもいつもの冷たい態度とは異なる心もちで、私を待っていてくれるでしょう」という意も込めたか。

【通釈】 男から

闇夜がすばらしく、風も涼しくなる頃は格別な情趣で、あなたは私の訪問を待つまいなどとお思になるでしょうか。いいえ、いつもは冷淡なあなたも、いつもとは異なる心もちで待っていて下さるでしょう。

【補説】 当該歌は、

月夜よし夜よしと人に告げやらば来てふにたり待たずしもあらず

（古今・恋四・六九二 よみ人しらず）

の影響を受けた詠と思われる。つまり『古今集』では、女が「月が美しい、夜が美しいとあの人に伝えたならば、それはまるで来てくださいます言っているようなものです」とするのを踏まえ、当該歌では男が、「こんなに素晴らしい夜には、あなたは私を待っていてくれるでしょう」と詠むのである。

また当該歌では、月夜ではなく闇夜でも格別な情趣で自分の来訪を期待しているであろうとする。『信明集注釈』では、

月夜には来ぬ人待たるかきくもり雨も降らなむわびつつも寝む

（古今・恋五・七七五 詠み人知らず）
を挙げ、「闇夜で涼風の吹く時も特に人待つ心用意がされるもの」と解説している。

二七九番歌

月あかく花面白き夜、女

あたらしい夜よの月と花とを同じくはあはれ知れらん人に見せばや

【異同】 おな□くは↓おなしくは（御）、あ□□□らん人□□せはや

↓あはれしれらん人に見せはや（御）（底本・御所本のみの所収歌）

【本文校訂】 底本の不鮮明箇所を御所本によって補った。

【他出】 信明・九九、後撰・春下・一〇三、三十六人撰・一〇〇、古来

風林抄・三〇五、俊成三十六人歌合・七〇、定家八代抄・一六七、時代

不同歌合・一八一、三百六十首和歌・五五、歌林良材・四二四、雲玉・

九四、源氏物語古註釈書引用和歌・一二五、三〇九、四二六、八五七

【語釈】 ○あたらしい夜 空しく過ぐすには惜しい、すばらしい夜。「あた

らしい夜を妹とも寝なで取りがたきあゆとるとと岩の上にあて（古今六帖・一五二三 人磨）」。○月と花とを 月と花を並列させて賞美する。

花は特定できない。○あはれ知れらん人「らん」は存続の助動詞「り」の未然形+仮定の助動詞「ん」の連体形。「情緒を解するであろう人」の意。「色も香もまづわがやどの梅をこそ心しれらん人は見にこめ（信明・一九）」。

【通釈】 月が明るく、花が趣深い夜に、女が

空しく過ぐすには惜しい素晴らしい夜の月と花を、同じことならば

情緒を解するあなたにお見せしたいものです。

〔補説〕 当該歌は他本に無く、『信明集』には信明が女の家を訪れたが、女が会わなかったために詠んだ贈歌として収載されている。『信明集』における当該歌への答歌は『古今集』に収載される友則の歌（春歌上・三八）であり、女の作ではない。このことについて、『信明集注釈』では、元来は別々の歌であったとみられることや、贈答歌としての適切な呼応を成していないこと、『信明集』には物語化の傾向が見える箇所があることから「編者の「遊び」と考えたい」としている。当該歌は、『後撰集』や『三十六人撰』、『古来風躰抄』なども全て信明の歌として採られている。

二八〇番歌

人□□□□□思ふころの村雨は身よりあまるぞまことなりける

〔異同〕 人□□□□□ふ□ろの↓人□□□□□おもふころの（御）、まことなりける↓ま、となりける（御）（底本・御所本のみの所収歌）

〔他出〕 伊勢・一二八

〔語釈〕 ○上句 底本・御所本ともに欠損がはなはだしく、判読しがたい。○村雨 急に激しく降っては止む雨で、秋の景物として詠まれることが多い。ここでは涙の比喩。「つねよりもけふのむらさめたなばたのわかれををしむなみだなるべし（為信・一三八）」○身よりあまる 涙が身からあまると詠む例は見出しがたい。

〔通釈〕（初句、第二句の一部欠損）物思いをする頃の村雨は、身からあふれ出した涙であるのは本当であったな。

〔補説〕 他出に掲げた『伊勢集』一二八番歌は、「人しれず物おもふと

きのむらさめは身よりすてふはまことなりけり」と異同があり、木船注釈では当該歌を「伊勢歌の改変借用か」する。

しかし、当該歌と伊勢歌はほぼ同一の内容で、異同と捉えられる範囲の語の差異であることを考えると「改変」というよりも、どちらかがどちらかに混入した可能性も考えなくてはならないだろう。

また、当該歌（伊勢歌）は、『古今六帖』所収の「人しれずもの思ふ夏の村雨は身よりふりぬるものにぞ有りける（むらさめ・四八八）」を本歌として、「かの古今六帖歌が言っていたことは本当だったのだ」と詠んだものと考えられる。

二八一番歌

五月雨の夜も明けがたき嘆きかなもの思ふことや秋となるらん

〔異同〕 あけかたき↓あけかたに（西・前）、なけきかな↓なけくかな（西）、□のおもふ↓ものおもふ（御・西・歌・前）、あきとなるらん↓かみとなるらん（歌）あきになるらん（前）

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○五月雨 五月雨の降る情景に、物思いに沈む状況を重ね合わせる。ここでは涙の比喩。○夜も明けがたき嘆きかな 底本には「け」の横に「き本」あるが、歌の内容から「明けがたき」を採用した。嘆きのために夏の短い夜でさえなかなか明けないことを意味する。「五月雨に乱れてものを思ふ身は夏の夜をさへ明かしかねつる（躬恒・二八一）」○もの思ふことや秋となるらん 底本の不鮮明箇所を他本によって補った。今は夏であるのに、恋の嘆きのために夜が長く感じられ、秋

になったのだろうかと疑う。「秋」に「飽き」の意を掛ける。「我が袖にまだき時雨の降りぬるは君が心にあきや来ぬらむ（古今・恋五・七六三よみ人知らず）」。

〔通釈〕 五月雨のごとく涙が流れ、夏の短い夜でさえもなかなか明けな
いと感じるほどの嘆きであることよ。物思いをするうちに秋になっ
て、あなたに飽きられてしまったのだろうか。

二八二番歌

為基新発意のもとへ。十二首

今日までも生ける身の憂さ向かひゐて背くほどだに恋しかりけり

〔異同〕 なし（底本・御所本のみの所収歌）

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○為基 生没年未詳。参議大学頭齊光の二男。中務邸に起居する「法師」（信明の息子で井殿の腹違いの兄）に私淑し中務邸に訪問していた。赤染衛門の初恋の人でもある。○新発意 発心して新たに仏門に入った者。為基の出家の時期は定かではないが、摂津守を罷免された永祚元（九八九）年頃か。○今日までも生ける身の憂さ 残老の憂愁。○向かいゐて 向かい合って居ての意。「向かひゐて背くほどだにきもきえて嘆きしものを月の経にける（古今六帖・第五・二七六九 いけのうへの大君）」。○背く「向かいゐ」との対照表現。「背く」は、後ろを向く意と、出家をする意の掛詞。当該歌のように掛詞として歌に用いている例は少ない。

〔通釈〕 為基新発意のもとへ送った歌。十二首

今日までも生き長らえた我が身を辛く思います。向かい合っていて、あなたが後ろを向くだけでも恋しいと思ったのに、世を背く身となってしまうでしたね。

〔補説〕 当該歌は中務の残老の詠ではあるが、「背くほどだに恋しかりけり」など、恋愛歌のポーズで詠まれていることに特徴がある。なお、為基が出家した頃と考えられる永祚元年（九八九）には中務は八〇歳近いと考えられる。為基の年齢は定かではないが、赤染衛門などの関わりから推定すると四十代くらいか。

二八三番歌

忘れられてしまどろむほどでもないつかは君を夢ならで見む

〔異同〕 なし（底本・御所本のみの所収歌）

〔他出〕 拾遺抄・恋下・三七三、拾遺集・哀傷・一三二二、金玉・雑・五四、三十人撰・一二一、深窓秘抄・八四、三十六人撰・一四一、宝物集・三一六、俊成合・一〇八

〔語釈〕 ○忘れられて 自然と忘れて。「れ」は自発。「見る夢にうつつの憂さは忘れられて見るになぐさむほどぞ悲しき（村上・一〇四）」。○いつかは君を夢ならで見む 「かは」は疑問の意。今は夢で会えるが、いつあの世で会えるのだろうかと解釈した。

〔通釈〕 悲しみを忘れて、少しの間うとうとと眠る時間が欲しいものだ。一体いつ、あなたと夢ではなく直に会うことができるだろうか。

〔補説〕 当該歌は為基新発心に送った歌の一つとして配列されているが、他出である『拾遺集』と『宝物集』では詠歌事情が異なる。

むすめにおくれ侍りて

忘られてしばしまどろむほどがないつかはきみを夢ならで見ん

（拾遺集・哀傷・一三二二 中務）

小野の宮の女御、かくれさせたまひにければ、年ごろまかりつきて、ありがたくおぼしたりし事をなげきてよみ侍りける
忘られてしばしまどろむ程もがないつかは君をまどろまでみん

此歌、拾遺抄には、「子にをくれて」と侍る、世継の下には、

「女御にをくれて」といふ。（宝物・三一六 中務）

前者は中務の娘井殿が亡くなった折の歌とし、後者は小野の宮の女御、つまり実頼の娘で村上天皇女御述子が亡くなった折の歌とする。

二八四番歌

なき影は浮かばざりけり涙川わか身なかみはなとかなれとも

〔異同〕 な□た川↓なみた川（御）、なと□なれと□↓なとかなれとも

（御）（底本・御所本のみの所収歌）

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○なき影 故人の面影。○浮かばざりけり 姿は川の面には浮かばない意。川面に影が浮かばないくらいに流れが速い、つまり涙が止まることなく流れる悲しみの深さを表現している。「浮き」は涙川の縁語。「涙河みなぐばかりの淵はあれど氷とけねば影は浮かばず（古今六帖・第一・七七五 よみ人しらず）」。○涙川 流れる涙を川として見立てた表現。「涙川いづる水上はやければせ堰きぞかねつる袖のしがらみ（貫之・五六二）」。○わか身なかみはなとかなれとも 「なとかなれと

も」については、『新編国歌大観』や『新編私家集大成』、木船注釈、『女

流歌人中務』では「なとりなれとも」と「か」の部分で「り」と翻刻している。「可」と「利」の字母は似ており、御所本ではどちらとも判断し難い。親本である底本では「可」と判断できるため、当該歌では「なとかなれとも」と翻刻した。しかし下句は意が通らず解釈はし難い。

〔補説〕 参照。

〔通釈〕 亡き人の面影は激しく流れる涙川の川面には浮かばなかった

ことだ。（下句「わか身なかみはなとかなれとも」は問題が多いので通称は示さない。）

〔補説〕 当該歌の下句「わか身なか身はなとかなれとも」が解し難い。木船注釈では「わが身なが身はひとつなれども」と校訂を試みて、「わが身もあなたの身も、決して離れずひとつなのですけれども」と解釈している。

底本で「わか身なかみ」と「身」の字を用いていることから「我が身汝が身」と解釈するのは頷ける。しかし「なとか」の部分で「ひとつ」と校訂してもなお解し難い。

『女流歌人中務』では、「わか身なかみはなとりなれとも」を「我が水上は名取なれども」と解釈し、上流が名取川なのだから、川は名取川と解釈している。そして、『古今集』の「名とり河せぜのむれ木あらはれば如何にせむとかあひ見そめけむ（恋三・六五〇 よみ人しらず）」をベースに次のように述べている。

「瀬々の埋もれ木」が姿を現す川であるが、川は流れる場所に
よって名前が変わる。流れ流れて涙川ともなると、「埋もれ木」
はもちろん、「なき影」などは川面に浮かばないのだ。

両者の解釈を参考にしても、涙川に亡き人の面影が浮かばないという上

句に対して、やはり下句の意味が解釈し難い。本文の乱れなどの可能性も考えられるが、当該歌は他本には収載されておらず、他出も見出せない。そのためここでは通釈を呈さなかった。

二八五番歌

しきりつつ^{なみだ}涙のかかる袖のうらに忘れ^{わす}貝をば拾^{ひろ}はざりけり

〔異同〕 なし（底本・御所本のみの所収歌）

〔他出〕 夫木抄・一一四九四

〔語釈〕 ○しきりつつ「しきる」は類（しく）と同根。同じ事が何度も続いて起る。後から後から続く。「つつ」は継続・反復の意。「白浪のうちしきりつつ今夜さへいかでかひとぬるとかやきみ（拾遺集・恋四・八五一 よみ人しらず）。○袖のうら 衣の袖が浦になるくらいに涙に濡れる喩え。衣の「裏」と「浦」の掛詞。袖の浦は出羽国の歌枕。○忘れ貝 離れてしまった貝の一片を指す。これを拾えば恋しく辛い思いを忘れることができるとされていた。当該歌は「拾はざりけり」と続くので、亡き人への気持ちを忘れることはできないという意。「忘れ貝拾ひしもせじ白玉をこふるをだにもかたみと思うはむ（土佐日記・四二あるひと）」。

〔通釈〕 後から後から頻りに涙が降りかかる衣の袖の裏。その名と同じ袖の浦で、恋慕う思いを忘れることができるという忘れ貝などは拾わなかったことです。

二八六番歌

露のごとあだなるものの年を^と経てふりがたく憂^{うれ}き身にこそありけれ

〔通釈〕 人の命は露のように空しいものではあるものの、年月を経ても老いがたくつらい我が身であることです。

二八七番歌

袖濡^{そでぬ}るる雪間^{ゆきま}をわけてしのお草かたみのこにもつみ入^いれつるかな

〔異同〕 つみ入つる□な↓つみ入つるかな（御）（底本・御所本のみの所収歌）

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○袖濡るる 雪間を分けるために袖が濡れることと、涙で袖を濡らすことの両意を表す。○しのお草 シダ類ウラボシ科の落葉多年草。「冬寒み根さへ枯れにししのお草もゆる春べは我のみぞ知る（一条摂政・一四七）。「しのぶ」には故人を偲ぶ意を掛ける。○かたみのこ「かたみ」は「筐」と「形見」、「こ」は「籠」と「子」との掛詞。「妻の亡くなり侍りて後に、子も又亡くなり侍りにける人を問ひに遣はしたりける／＼かにせんしのぶの草も摘みわびぬかたみと見えしこだになければ（拾遺抄・雑下・五六六 よみ人知らず）」。

〔通釈〕 袖が濡れる雪の間をかき分けてしのお草をば筐に摘み入れる、故人を偲ぶ涙で袖を濡らしながら若菜を摘み、形見の子のためにも

籠に入れるのです。

〔補説〕 当該歌は、下の句「かたみのこ」から、中務が子を亡くした悲しみの中で、遣された孫を思いつつ若菜を摘むさまを詠んだものかと考えられ、ここはその方向で解釈した。

二八八番歌

打ち捨てて別るる秋のつらきよりいと吹き添ふ木枯らしの風

〔通釈〕 あなたが私を打ち捨てて別れた秋の薄情さ以来、ますます強く吹き加わる木枯らしの風がつらいことです。

〔補説〕 当該歌は、底本では、前歌や二八九番以降の哀傷歌がまとまった部分と内容的に繋がるように見える。しかし、西本願寺本では「九月つごもり夜風の吹くに」（二五二番詞書）として末尾から三首めに見え、特に死別等との関わりや連作を思わせる配列ではない。歌仙本では集の末尾歌になっており、詞書も歌の並びも西本願寺本とほぼ同じ。表現からは、辛い恋の嘆きとも哀傷とも考えられる歌である。

二八九番歌

身□□□□□□□□□□うゑに宿るともな□□□□□□□□かなしも

〔通釈〕 身は……の上に宿るとしても、……悲しいことよ。

〔補説〕 哀傷歌の一首とも思われ、「うゑに（上に）宿る」からは、「身はやがてはちすの上に宿るともなほ別れにしことのかなしも」のような

釈教歌的な歌が想像されるが、語句の欠損が多く、解釈不能である。

二九〇番歌

何ごとにつけてもまさる涙かな聞き見て春になりぬべしとか

〔異同〕 なりぬへしと□↓なりぬへしとか（御）（底本・御所本のみの所収歌）

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○聞き見て あなたの消息を聞かないで。木船注釈・『女流歌人中務』共に、「君見で」と校訂している。

〔通釈〕 何ごとにつけても益々流れる涙であることよ。あなたの消息を聞くことも会うこともなく世間は春になったというのでしようか。

〔補説〕 歌のまとまりを考慮して、中務が誰かを亡くした際の哀傷として解したが、為基が出家して疎遠になったことを残念に思う詠ともとれる。

二九一番歌

消え果てて何に残れる我が身ぞも世にまだありと人に知らずな

〔異同〕 なし（底本・御所本のみの所収歌）

〔他出〕 なし

〔通釈〕 消え果てもしないで何のために残っている我が身なのでしょう。この世に生きながらえていると他人に知らせないでください。

二九二番歌

かかる世に久しく経じと思ひしを目だに心になはぬぞ憂き

〔異同〕 なし（底本・御所本のみの所収歌）

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○かかる世 子や孫に先立たれた世の中。○目だに心になはぬ 「心にも命かなはぬ身なりけりかくても生ける我が身と思へば（元真・二三八）」のように命は心になわなぬものと詠まれるが、当該歌は「命ばかりか目ですらも思うようにならない」とする。子を失った親が涙にくれる我が身を「目も見えはべらぬに、かくかしこき仰せ言を光にてなん（源氏物語・桐壺）」と嘆く表現は散文中に多いが、ここでは涙に曇る目で家族のいないこの世を見なければならぬことを嘆いている。

〔通釈〕 このように世の中に長生きするまいと思つたが、命はもちろん思い通りにはならず、辛い現実を見続けることになったのは悲しいことです。

二九三番歌

うきながら消えせぬものは身なりけり羨ましきは水の泡かな

〔異同〕 なし（底本・御所本のみの所収歌）

〔他出〕 拾遺抄・恋・三七四、拾遺・哀傷・一三二三、麗花・二八、時

代不同歌合・一七九、紫明抄・河海抄（宿木）

〔語釈〕 ○うきながら「浮く」と「憂く」をかける。

〔通釈〕 辛いながらも消えもしないものは我が身であることだ。羨ましいのは、同じように「浮き」、消えていく水の泡であることよ。

〔補説〕 当該歌は『拾遺集』に「むまごにおくれ侍りて」という詞書で収載されている。次歌「補説」参照。

二九四番歌

麗景殿の宮の君は、法師の妻にこそあめれ、亡くなりて、書きつきたりし手を、いるがもとへ

秋はてて風に残れることの葉を形見に見んと思ひきや君

〔異同〕 れい□□殿の↓れいけい殿の（御）、□ふしの↓はふしの（御）、か□つきたりして↓かきつきたりして（御）（底本・御所本のみの所収歌）

〔他出〕 なし

〔本文校訂〕 底本の不鮮明箇所を御所本にて校訂した。

〔語釈〕 ○麗景殿の宮の君 麗景殿に仕える女房。二二七番歌参照。「亡くなりて」「書きつきたりし」の主語となっている。○法師の妻にこそあめれ 底本「めにめれ」では解釈不能。木船注釈では「妻なめれ」と校訂し、「こそ」がないことに疑問が残るとする。ここでは「妻にこそあめれ」とあったのが脱落したと考え校訂した。「めれ」は婉曲。「法師の妻にこそあめれ」は、麗景殿の宮の君について挿入句的に解説した部分となる。「法師」は、当該歌の詞書から麗景殿の宮の君の夫と見られる。伊尹と井殿との間の子という説、井殿の異母兄弟という説などが

ある。二二二、二二七番歌参照。○書きつけたりし手 亡くなった麗景殿の宮の君が書きつけた筆跡。○いるがもとへ「いる」は「補説」参照。中務が、麗景殿の宮の君の筆跡を「いる」のところへ贈ったのである。○秋はてて 秋が終わって。「秋果つ」は、「飽き果つ」と掛けて詠まれることが多い。「秋果てて時雨ふりぬる我なれば散る言の葉をなにか怨みむ（後撰・冬・四四八 よみ人知らず）」。しかし、当該歌の場合、亡き人の形見の品を贈られたという状況から見て、掛詞ではあるまい。○ことの葉 ここでは手紙の筆跡。

『通釈』 麗景殿の宮の君は、法師の妻であつたようだが、亡くなって、

書きつけてあつた筆跡をいるのもとに贈る時に

秋が終わって風に吹き散らされずに残った木の葉のように、残された筆跡を形見として見るようになるうとは思つたことがありましたか、思いもしなかつたでしょう、あなた。

『補説』 当該歌から二九八番歌まで麗景殿の宮の君に対する哀悼歌が続く。「いる」について、山口博氏「中務の家の人々」（『平安文学研究』三二輯、昭和三八年十二月）は「麗景殿宮君と法師との間の子であろうか」とし、木船氏「はふしとその周辺の人人と」（『中務集』点描）（『中京国文学』十号、平成三年三月）は「いるは為基室であつたのだろう」と指摘。稲賀敬二氏「王朝物語の制作工房―中務の住む町―」（『古代文化』四五号、平成五年五月）は「『いる』を『井殿』の誤写と見る」としている（誤写説の可能性については二九六番歌「補説」参照）。以上の説は「いる」を女性と解しているが、小柳淳子氏「『中務集』人物考―「れいけい殿の宮のきみ」を中心に―」（『国文』八二号、平成七年一月）は「いる」を「男性であろう」とし、「いる」に「源沃^い」という人物をあてている。いずれとも確定しがたいが、形見の品を受け取る親

密な立場にあつた人物であることには間違いなく、麗景殿の宮の君の娘とする説が考えられるが、「井殿」である可能性も捨てがたい。

二九五番歌

いる返^かし、住みけるなるべし

ことのはをあはれなる風にまかせおきて身のいかなれば亡^{たし}くなり
けん

『異同』 なし（底本・御所本のみの所収歌）

『語釈』 ○住みけるなるべし いるが中務とともに住んでいたのだろうと推量している。後人の注記が本文化したものか。○あはれなる風 しみじみとした感慨を呼び起こす秋風。麗景殿の宮の君の筆跡を届けてくれた中務を暗示する。○いかなれば 底本「筏師」は、材木を筏で運搬する職人の意で「浅き瀬をこす筏師の綱弱みなほこのくれもあやふかりけり（後拾遺・雑二・九〇五 よみ人知らず）」のように「くれ（皮のついたままの材木、「暮れ」を掛ける）」とともに詠まれることが多い。木船注釈は「筏師」とは考えられず「いかなれば」の誤写であるとして改訂している。第五句の「亡くなりけん」の「けん」は過去推量で、上に不定称の語がくることが多い。「よひよひに枕定めむ方もなしいか寝に寝夜か夢に見えけむ（古今・恋一・五一六 よみ人知らず）」よつて、木船注釈が指摘するように、「いかなれば」などの誤写と見ざるを得ないであろう。

『通釈』 いるの返し、一緒に住んでいたのであろう。

残された筆跡をあわれを催す秋の風にまかせておいて、あの人はど

うして亡くなってしまったのでしょうか。

〔補説〕 麗景殿の宮の君の死を悲しむとともに、残された筆跡を届けてくれた中務への感謝の気持ちを示した。

二九六・二九七番歌

川近きところにて、井殿がもとへ

ほのぼの^くと朝立^{あきた}つ川の霧^{きはきり}よりもこ□□□□□□□□□□そふれ

〈二行欠損〉

なき人の面影^{おもかげ}見ゆる川霧^{かはきり}に晴る^はる間^まなくも秋^{あき}や恋^{こひ}しき

〔異同〕 い殿かもとへ↓いるかもとへ（御）、かはきりに↓かはきに

（御）（底本・御所本のみの所収歌）

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○ほのぼのと 平安期には、主にほんのりと夜明けになりゆく状態をあらわす。欠損している下句部分にそうした表現があったか。

○朝立つ川の 底本二九六番歌第二句は「あさたつきの」の「きり」の「り」にはミセケチが入っており、右に「かは」とある。「きり」の「き」の左脇は欠損していて確認できないが、おそらく「き」にもミセケチが入っていたものと思われる。よって第二句は「あさたつかはの」とした。○二九六番歌下句 底本下句の大部分が欠損し、判読し難い。御所本の書写段階には欠損していたらしく、数文字分空白となっている。○なき人の 歌の前に一行、おそらく詞書にあたる部分が欠損し、判読し難い。この歌は、中務が井殿に贈った二首目ではなく、井殿の返

歌と考えるべきか。○面影見ゆる川霧に 「川霧に故人の面影が浮かぶ」の意と思われるが、そうした詠みぶりの歌を先行・同時代歌に確認し難い。あるいは、下句が欠損している一首目の内容に関連する表現か。また、当該二首が、誰への哀傷を詠ったものか不明である。○晴るる間なくも 「晴るる」は「霧が晴れる」と「心が晴れる」との掛詞。「秋霧の晴るる時なき心にはたちゐの空も思ほえなくに（古今・恋二・五八〇躬恒）」。

〔通釈〕 川に近い所で、井殿のもとに

ほのぼのと朝立つ川の霧よりも、……

（二行欠損）

川霧には亡き人の面影が浮かんで見えるので、心が晴れる間がなくとも、絶え間なく霧の立つ秋が恋しく思われます。

〔補説〕 二九六番の贈り先は、底本では「井殿」となっているが、御所本では「いる」と誤写されている。二九四、二九五番歌に、「いる」という人物が登場しているが、当該歌の誤伝の様相から考えると、こちらも本来は「い殿」であったものが、底本以前の伝写段階で「いる」と誤写された可能性も考えられる。

二九八番歌

ためもとかへ
為基返し

ほどもなく昔^{むかし}を聞く^きに悲^{かな}しきは涙^{なみだ}や年^{とし}を隔^{へだ}てざるらん

〔異同〕 なし（底本・御所本のみの所収歌）

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○為基返し 詞書は「為基の返歌」とするが、前の二首とは語彙や表現の連関性がなく、贈答の体を成していない。よって前の二首とは別に詠まれたものと考え。○涙や年を隔てざるらん 涙は、年月を隔てて故人への悲しみを薄れさせるものではない（悲しみが癒えるには、もっと時間が必要だ）の意か。

〔通釈〕 為基の返し

故人を亡くして時を経ない内に、昔のことを聞くと悲しく感じられるのは、涙では年月を隔て、故人と過ごした時間を遠のさせることができないからでしょうか。悲しみを薄れさせるには、まだまだ時間が必要です。

高野 晴代（日本女子大学教授）

高野瀬恵子（日本女子大学非常勤講師）

加藤 裕子（日本大学大学院博士課程後期単位取得満期退学）

森田 直美（国文学研究資料館特任助教）

斎藤由紀子（日本女子大学大学院博士課程後期単位取得満期退学）

遠間 倫世（日本女子大学附属高等学校教諭）

曾和由記子（日本女子大学大学院博士課程後期在学）

谷崎たまき（日本女子大学大学院博士課程後期在学）